

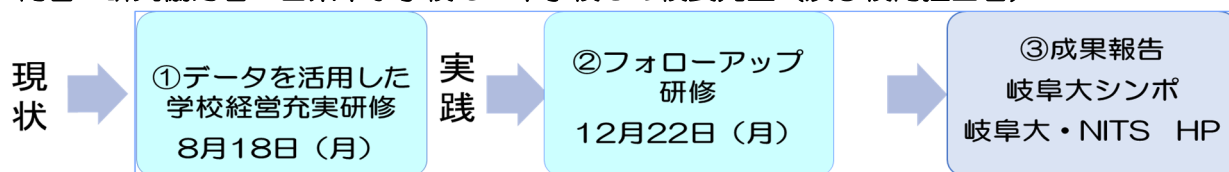
令和7年度 NITS・岐阜大学教職大学院等コラボ研修プログラム支援事業 データを活用した学校経営充実研修

1 研修開発の趣旨

今日、全ての子どもによさや可能性を引き出す学校教育を実現するために、校長先生には従前求められてきた教育者としての資質やマネジメント力に加えて、様々なデータを活用して学校の教育力を最大化していくことが求められています（2022年12月19日中央教育審議会答申）。

本事業は、学校管理職が学校経営方針を具現化するために、どのようにデータを活用できるかの知識を学び(1回目)、実践の振り返りから気づきを得る(2回目)探究型研修を開発しました。

2 内容 研究協力者：山県市小学校9・中学校3の校長先生（及び校内担当者）



①データを活用した学校経営充実研修 8月18日(月)13:00－15:00

第1部 学校経営方針を具現化するためのデータ活用

講師 岐阜大学教職大学院（平澤紀子教授、吉澤寛之教授、原尚特任教授、古賀英一特任教授）岐阜県教育委員会（教育総務課教育主管 三島晃陽 氏）

資料提供 岐阜市立加納小学校（校長 岩佐 優 氏）

第2部 グループワーク：自校の充実策の作成

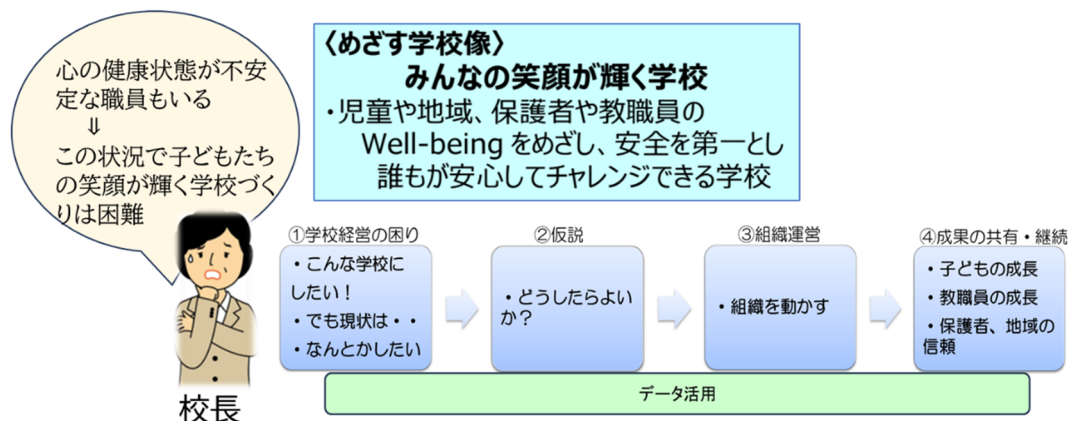
第3部 全体交流・まとめ

【学校経営方針を具現化するためのデータ活用】

校長先生の問題意識を起点として、どんなデータに注目し、どのように活用するかを考えました。

なぜ、データを活用するのか？

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 経験や勘は大切、でも・・・<ul style="list-style-type: none">→教育目標と実態のずれ→管理職と教職員のずれ→子どもと教職員のずれ→教職員と保護者のずれ・ 教育指導が不十分に・ リスクに気づかない、問題が拡大・ 子ども、教職員、保護者、地域の信頼低下・ 教育目標の実現が不十分 | <ul style="list-style-type: none">・ 経験や勘を確かなものにする<ul style="list-style-type: none">→実態に応じた教育目標→教職員のベクトルを同一にできる→子どもの願いや困りに寄り添える→保護者の願いや困りに寄り添える・ 適切な教育指導・ リスクを把握し、予防的に対応できる・ 子ども、教職員、保護者、地域の信頼向上・ 教育目標の実現 |
|--|--|



②フォローアップ研修 12月22日（月）13:00-15:00 各校の実践交流



校長先生の問題意識は、「子どもの“見えにくい姿”をどう捉えるか」「教員の“感覚”と実態のズレ」「授業の主体性不足・学びの質の課題」「個別最適な支援の必要性」「保護者・地域との連携」等にありました。その問題意識をもとに、次のような実践と成果を報告されました。

①データに基づく実態把握と支援

アンケート・心情データ・学力調査などを組み合わせて子どもの状態を把握した。その結果、内面の変化や支援の必要な児童が早期に見える化された。

②授業改善と主体性の向上

授業アンケート→改善→再アンケートの流れを確立した。その結果、授業満足度や主体的な学習態度が向上した。

③個別最適な支援と安心感の向上

役割付与・褒める指導・心情把握などの個別支援を強化した。その結果、自己肯定感の向上や問題行動の減少が見られた。

校長先生の報告では、「データは学校経営の“考え方”そのもの」「本質は子どもの成長・安心感の向上」「組織的な共有・省察が学校文化を変える」「今後は予防的・予測的な活用が鍵」が指摘されました。

3 研修評価

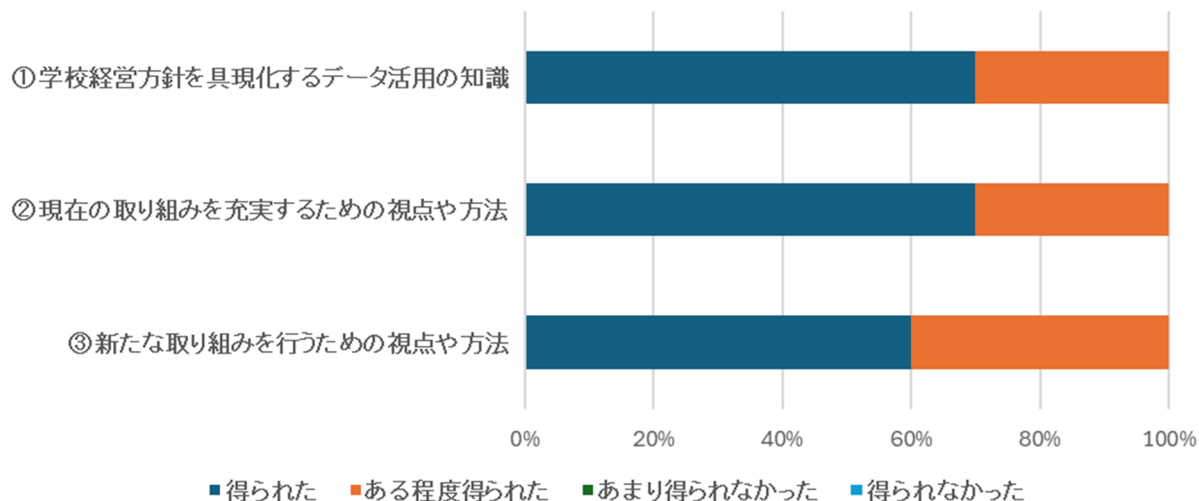
①全体的満足度

10点中8.7点

②研修で得られたこと（4件法）

「学校経営方針を具現化するデータ活用の知識」「現在の取り組みを充実するための視点や方法」「新たな取り組みを行うための視点や方法」のいずれも「得られた」「ある程度得られた」と回答されました。

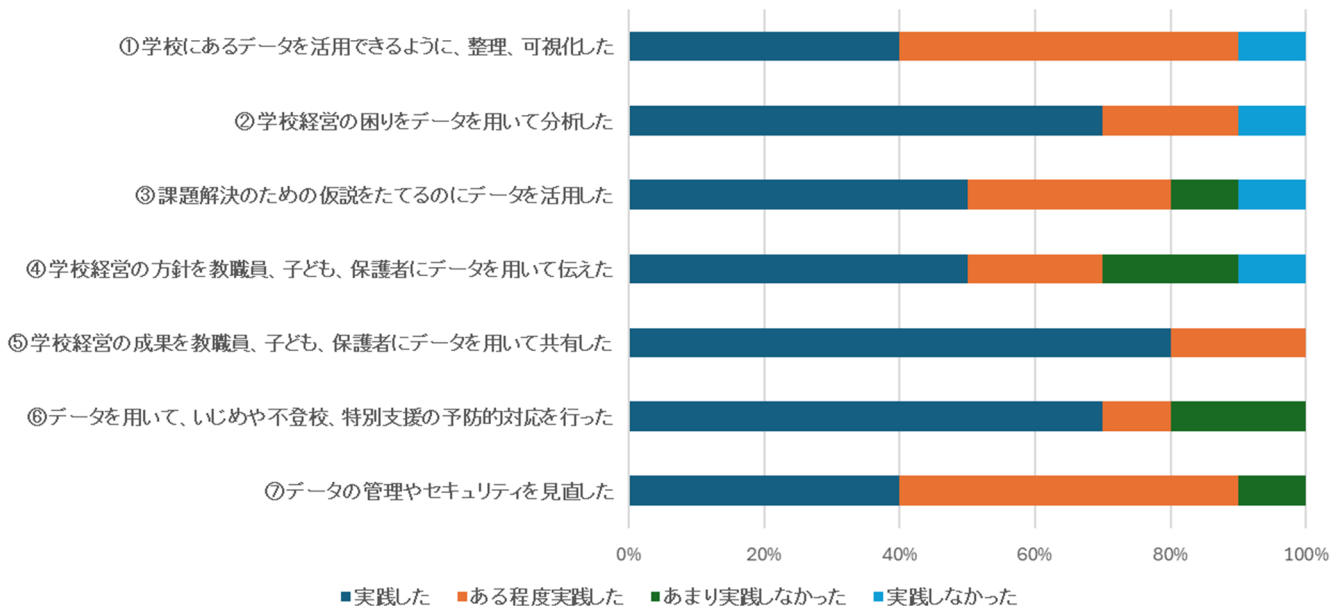
研修で得られたこと



③研修後に実践したこと

校長先生は、8月の研修で、学校経営を振り返り、充実策を作成し、実践しました。その中で、あらためて学校経営の困りを分析したり、予防的対応を強化したり、その成果を子どもや教職員、保護者に共有していることがうかがわれました。

研修後に実践したこと



④データ活用のよさ

校長先生は学校経営方針を具現化する上で、データを活用するという視点をもつことの「よさ」について、以下のことを指摘していました。

「学校経営の根拠が明確になる」

- ・経営方針の具体化、成果の検証、説明責任において、データが揺るがない根拠になる。
- ・感覚や経験に頼らず、客観的な説得力が生まれる。

「子ども理解が向上する」

- ・子どもたちの状況（願い・困り感・変容）を数値として可視化することで、主観の偏りを避け、決

めつけない視点で理解できる。

- ・教師が「子どもを見る目」を見直す契機になる。

「多様な見方・考え方が生まれ、指導・支援の幅が広がる」

- ・データを読み解く過程で、自分以外の視点や新たな気づきを得られる。
- ・多様なデータを組み合わせることで、より効果的な指導・支援の方法が広がる。
- ・職員間の情報共有が進み、学校全体で方針を具現化しやすくなる。
- ・客観データを共有することで、教職員の共通理解が深まり、経営方針の実行力が高まる。

「小規模校でも「個を追う」ことで成長を語れる」

- ・母数が少なくても、個々の変化を追うことで成果を示しやすくなる。

4 まとめ

データを活用することが目的でなく、管理職が子どもを理解した確かな学校経営を具現化するために、どのようにデータを活用できるかを学びの目的として明示することが重要であると考えます。そのために、「どんな学校にしたいか」という問題意識を起点として、そのためにどんなデータをどのように活用できるかを考える研修内容が有効であるといえます。

とくに、今回の研修を通じて、校長先生の語りは1回目よりも2回目でさらに明確になりました。このことは、校長先生が学んだ上での実践を通じて、学校経営方針を明確にし、それを教職員に共有し、そのことが子どもの教育の充実につながることを示唆しています。このような校長先生の言語化が重要であると考えられます。

一方、データ活用には、そのためのシステムが必要です。研究協力者の自治体ではデータ連係事業として、諸データからリスクを予測するシステムを開始しています。今後、管理職の学校経営を支えるデータシステムの整備も重要であると考えます。

5 NITS・岐阜大学教職大学院等コラボ研修成果報告シンポジウム

令和8年2月2日（月）13:00-15:50、「学校経営にデータを活用するとは？」を実施した。全国の大学、学校、教育委員会、市民等140名が登録し、活発な討論が行われました。

第1部 基調講演「管理職研修の高度化と教職大学院の役割」

文部科学省総合教育政策局政策課長 吉田 光成氏

第2部 事業報告

第3部 参加者交流

6 他の教育委員会等への参考

- ①NITSの研修観を踏まえ、管理職が自らの問題意識を基に理論と実践を往還し、気づきを得る研修。
- ②本研修により、管理職の職能の高度化および教育委員会の学校支援の向上を図れる。
- ③オンライン研修で、負担を軽減しながら、研修成果の勤務校や地域への還元ができる。
- ④全国の教職大学院や教育委員会に対して、管理職研修や教育委員会の学校支援に役立つ。

謝辞

研究協力者として研修を受講していただいた校長先生、ご協力いただいた岐阜県教育委員会様、山県市育委員会様、岐阜県小中校長会様に深く感謝申し上げます。